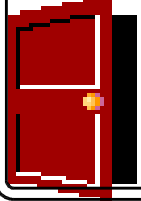


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



# 読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年8月29日 文責 渡邊

では、今回は小泉英明氏との対談から紹介していきます。章のタイトルは、「幼少期は特に、自然のなかに身をおくことが大事」です。

小泉 たとえば誰かが動いている様子を画面で見たとしても、自分自身がそのような体験をしていなければ、何をやっているのか、最初は理解できないはずです。でも自分に同じように動き回った経験があれば、画面を見るだけで、それが現実の画像でなくても何を表しているかがわかります。そういう意味で、一番最初に必要なのは実体験なのです。

コホート研究のところでもお話したように、発達とは時間軸に沿って変化します。時間の矢は反転できません。ですから順番が本質的な意味を持つのです。芸術教育でも心が先か技術が先かという議論が絶えません。たしかに両方ともに大切だと思いますが、私は心が先だと思っています。最終的な到達点に差が出てくるように感じます。

実体験の具体的な例でお話しますと、例えば、家庭のテレビがあります。色をつくりだすのに、赤・緑・青(RGB)の光の3原色を基本にしています。初期のブラウン管テレビでは、希土類金属が発する鋭い輝線スペクトルを単純に重ねてさまざまな色を出していました。一方、自然の世界は、まったく違います。なだらかだったり尖っていたりする複雑なスペクトルが重なり合って最終的な色が現れてきています。脳のなかの色覚受容体の個人差によって見えているものは異なります。

音だって同じです。ピアノの音は素敵ですが、周波数スペクトルを計測すると基本は音叉の響きに近い正弦波です。自然の音、たとえば雨だれや風や葉ずれの音、そしてせせらぎや波の音は、とても豊かな広い周波数を持っています。幼いときに、自然と触れ合うことによって、豊かな幅広い感覚系が育まれるのです。

自然の形をよく見てみると、縦線も横線も、そして曲線もとても豊富です。一方、人工の世界は、たとえば都市を見ると、横や縦の直線が異常に多いことがわかります。プラスチックの造花を部分的に拡大してみても、大きな変化は見られませんが、自然の花々は拡大すると次々と違う世界が広がります。このように豊かな情報を乳幼児期に取り込むことが、一生の宝になると私は思います。

それに実体験は、認知世界を広げるうえで重要です。というのも、私たちは実際の世界と、そこで起きているすべてのことを体験することはできないからです。人間の脳は、実体験のなかの特徴的なものを抽出して、それをもとに外の世界を認知しますから、実体験が多ければ多いほど認知世界も広がります。

あと、バーチャル体験と決定的に違うのは、意識下にまで多くの「生の情報」が入り、脳神経を活性化させることです。実体験では脳は、意識するまでもなく五感を総動員して無数の情報を取り込んでいきます。一方、バーチャル体験だと、どうしても得られる情報が限られます。つくられた世界は、人間の脳を一度通した抽象化されたものだからです。

だから脳が柔らかな幼少時は特に、自然のなかに身を置き、同時にたくさんの人と接して、できるだけ多くの実体験をさせることが大事なのです。(p138. 139. 140)

実体験の有用性がとても分かりやすく述べられているように思われます。

最後に、高橋和也氏との対談で次のように述べられています。

高橋 あのかきは「子供たちを自然の中に、脳化社会のその先へ」というテーマでこんな話でした。

「自分」とは最初、直径0.2ミリの受精卵だった。それが50キログラム、60キログラムの大人になっていく。「自分」の体は田んぼや畑、海からとってきたものを食べてつくられた。つまり自分自身は環境そのもの。自然の一部である。

ところが、都市化とともに、人間は自然からどんどん離れ、現代は意識が肥大化した「脳化社会」になってしまった。AI(人工知能)化は象徴的な現象で、自然の一部である人間が壊れていっている、という見方もできる。

そんなふうに意識が肥大化すると、死も生も自分で支配できるものと考えがちだがそれは違う。死も生も自分で支配できるものではない。人は与えられた命を全うして生きる存在である。

ともすれば都市化のなかで失われていきかねない「人間らしさ」を取り戻すためには、知識や情報を頭で得るのではなく、自然のなかに身を置いて、五感を通して自分の周りで起きるさまざまな現象を感じ取ることが大切だ。脳化社会の先を切り拓くのは、泥だらけになって遊びながら自然体験を積んでいる子供たちなんだ。

(p162.163)

養老孟司氏の著書はおもしろいですね。前回と今回の読書通信は、6年生の保護者から勧められた図書を読んでまとめました。4人の識者と語り合うという形で論は展開していきますが、それぞれの先生方の特徴がよく現れていると思われます。

この図書は、体験活動の重要性が強く主張されています。これは、本校の「強み」である豊かな自然環境を生かした教育活動が認められたことになるものと嬉しく思います。

豊かな体験活動はとても大切なことです。その活動を通して何を学ぶのかがより重要なこととなります。

「五感を働かせること」これがポイントとなるのかもしれませんが。文字や映像等からは、視覚や聴覚が働いても他の感覚は働くことが少ないですものね。

例えば、5月の「お茶摘み体験」については、お茶の葉の色の違いに気付く子供(視覚)、葉を触ってその違いに気付く子供(触覚)、葉の香りに気付く子供(嗅覚)、周りの様子(風の流れ、鳥のさえずり等)に気付く子供(聴覚)、摘んだお茶を味わう子供(味覚)。これらを働かせる学びが大切となります。しかし、困ったことに活動している子供たちはよい気付きをしているにも関わらず自覚化されないでいるのです。

そこで、こうした「無自覚的な気付き」を自覚化させる手立てが必要となります。そうです。「振り返り」ですね。体験活動の振り返りでは、行動についての振り返り(しっかり観察できたとか、ていねいに世話をを行った等)が多くありませんか？その転換が必要になります。読書活動と豊かな表現活動とをリンクさせることで「五感」をより豊かにし、深く考えるようにしていくのです。

「体験活動」だけではだめ、「読書活動」だけでもだめなわけがここにあるように思います。

さあ、授業が再開しました。桑村小学校の「強み」を思う存分に発揮させ、豊かな体験活動と読書活動をつなげて、「豊かな感性」と「深い思考力」の育成に努めていきたいと考えます。

どうかこれからもご理解・ご協力をよろしくお願いします。



【令和4年5月の茶摘み体験】